

<b>国際金融論</b>		<b>講義</b>	<b>教授 田中 秀臣</b>	
<b>科目カテゴリー</b>	<b>国際ビジネスコースの選択必修科目, 会計ファイナンスコースの専門選択科目, 経営・経済コースの専門選択科目</b>	<b>科目ナンバリング</b>	<b>23122202</b>	

### 1. 授業のねらい・概要

毎日のニュースをみていると「前日に比べて2円円安の1ドル140円でした」と解説者がテレビで話し、または新聞記事で書かれてあるのを目にすることがあるだろう。私たちの日常生活をとっても海外旅行に行くときに、銀行や交換所で円を旅行で行く先々の通貨と交換する。その時の交換比率が旅行に行く前と後では変化していることに気が付くことも今は多いだろう。この授業では、このように日々変化し、また我々の日常生活でも身近な情報である為替レートがどのような理路で決まるのか、それを経済学的な観点から考えていく。そして国際間のおカネのやりとりが、日本や世界の経済とどのように関連しているのか、をも考察の対象とする。

### 2. 授業の進め方

指定した教科書などを参考に内容を、その時々の中身の時事テーマもからめてわかりやすく説明していく。初心者でも予備知識なく国際金融の理解が深まるように講義は進行していくだろう。その時々の中身の時事話題をふんだんに取り入れるので、授業計画の順番や内容が変更する場合がある。

### 3. 授業計画

<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 国際金融と日本・世界の経済</li> <li>2. 国際金融とGDP関連統計</li> <li>3. 貨幣の役割とマクロ経済</li> <li>4. 新型コロナ禍前後の日本の金融</li> <li>5. 外国為替市場の仕組み</li> <li>6. 為替レートの決定理論</li> <li>7. 為替レートの決定理論：応用</li> <li>8. 為替レートと日本経済の関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>9. 為替レートとユーロ圏</li> <li>10. 戦前の国際金融と世界恐慌（1929年以前）</li> <li>11. 戦前の国際金融と世界恐慌（29年以降）</li> <li>12. 戦後の国際金融制度（ブレトンウッズ体制）</li> <li>13. 戦後の国際金融制度（フロート移行）</li> <li>14. 現在の国際金融制度と世界経済</li> <li>15. 最新のマクロ経済政策と国際金融</li> </ul>
--	---

### 4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業の前に指定された参考資料を各自よく学んでおくこと。目安として1時間程度の学習時間が必要。

### 5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、レポートについては提出後に、標準的なレポートの書き方、求められたポイント、高得点のためのコツなどを解説する。

### 6. 授業における学修の到達目標

国際金融の理論と制度、歴史の基本項目について、一通りの理解と習得ができていくこと。

### 7. 成績評価の方法・基準

授業中の取り組み姿勢を重視する（50%）。期末には試験またはレポートを提出させて総合的に評価（50%）していく。

### 8. テキスト・参考文献

教科書として以下を利用することがある。

藤井英次『コア・テキスト 国際金融論 第二版』（新世社）。

浜田宏一・安達誠司『世界が日本をうらやむ日』（幻冬舎）

#### **9. 受講上の留意事項**

特になが、熱意をもって講義を理解しようとする姿勢が重要である。また現実の経済の話題に常に注意を払ってほしい。疑問や議論があれば積極的に質問してほしい。

#### **10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無**

該当しない。

#### **11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連**

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。